

第六回星野立子新人賞

「下睫毛」

古川 朋子

弓なりにはじまる坂や石落の花
短日やよその厨の透け見えて
冬の蠅白きページに戻り来る
岸边とて蹴る石ひとつなく小春
父の手のつめたし小銭渡すとき
人を待つ聖樹の玉に映りつつ
河の鮫深海の鮫となりあふ
落葉とは呼べぬかたちで吹きあがる
初鴉屋根のひなたの失せてなほ
トンネルにいつかなる穴淑気満つ
踏み入れしそこは冬野の果てであり
葉牡丹の鉢植ゑポピー美容院
看護師の注射の構へ寒の入
珈琲を濁すミルクや寒波来る
立春の櫛の齒しんと揃ひけり
梅咲いて舗道に丘の名残あり
春寒や腹立たしくも空腹で
すれ違ふとき船笛の冴返る
如月の鷗ふちどる光かな
ことごとく省略されて陶の雛
書けば手の影に入る文字春灯
風光るソファアのやうなオートバイ
霊園はいちにち日向ひばり鳴く
いくたびも会釈を返す東風の中
立ち漕ぎのひとり握るる蓬かな

駆け出して底持つ靴夏近し
新緑や尻ポケットに地図を差し
バス路線消えしより葉桜の道
ぶらんこに揺れてゐるのは蜘蛛の糸
蜘蛛二匹ひそやかに巣のうらおもて
梅雨探し噛み切れぬモツアレラチーズ
夏川の流れのたまるひとところ
ハイタッチ半分逸れて雲の峰
軽トラで来てかき氷売りにけり
下睫毛伸びしか夏瘦の君よ
夏帽の下の眠りをそのままに
ていねいに暮らすといふは心太
金網の奥より蛇の舌ぬと来
花火果て海の昏さに振り返る
しばらくは祭のふちをゆきにけり
食卓の夜は文机に桃香る
声とほく声に応ふる初秋かな
バス停に教室の椅子蝨とぶ
シャツターはポストを兼ねて花木檜
螳螂に貌のちからを抜けといふ
退屈と思わねど暇柿食うて
とびとびに席空く秋の半ばなり
三脚のつつ立つてゐる花野かな
栗ごはん画面の中で人が泣く
波音のとどかぬところ鳥渡る